



東京都へき地医療支援機構通信



令和3年度 夏号 (第7号)

【編集・発行】 東京都へき地医療支援機構
(東京都福祉保健局医療政策部救急災害医療課医療振興担当内)

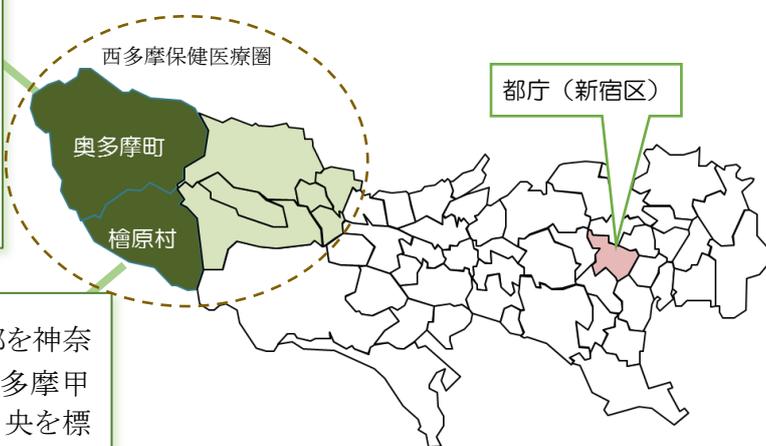
東京都のへき地公立医療機関の紹介 山間地域編 ～奥多摩町・檜原村～

東京都には山間地域のへき地として、奥多摩町と檜原村があり、西多摩保健医療圏の中でも最も西部に位置しています。深い緑に囲まれ、滝や溪谷、鍾乳洞をはじめとする雄大な自然の中で、登山や川遊び、地元の食材を使ったBBQ等が楽しめると共に、地域に根付いた祭りや伝統文化等が魅力の地域です。

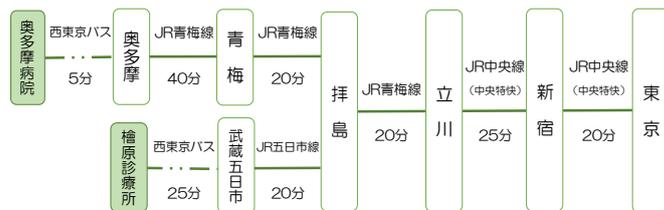
奥多摩町は、全域が秩父多摩甲斐国立公園に包含され、自然環境豊かで、昔ながらの山村文化があり、東京都の奥座敷として多くの方に親しまれています。また一方で、東京都心までは2時間で行ける距離にあり、田舎暮らしをするには最適な場所です。(※)

檜原村は、東京都の西に位置し、一部を神奈川県と山梨県に接し、村の大半が秩父多摩甲斐国立公園に含まれています。村の中央を標高900m～1,000mの尾根が東西に走っており両側に南北秋川が流れていて、この川沿いに集落が点在している緑豊かな村です。(※)

(※) 各自治体のホームページから引用



交通アクセス(電車)



今回は、この地域で地域医療の中心的な役割を担う2つの公立医療機関を紹介します。

町村名	人口	面積 (km ²)	公立医療機関	病床数	医師数
奥多摩町	4,991	225.53	奥多摩病院	43	4
			日原診療所(出張)	—	—
			峰谷診療所(出張)	—	—
			古里診療所(公設民営)	—	1

町村名	人口	面積 (km ²)	公立医療機関	病床数	医師数
檜原村	2,112	105.41	檜原診療所	—	1

※人口:住民基本台帳による令和3年1月1日現在の人口

東京都へき地医療支援機構無料職業紹介事業所

へき地医療機関での勤務に御興味のある方は、ぜひ、東京都へき地医療支援機構が運営する無料職業紹介事業所のホームページをご覧ください。

https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/iryu/iryu_hoken/ritousankan/hekiti_shokai.html



奥多摩病院は、地域の方々の中核医療施設としてだけでなく、ハイキングなどで訪れる観光客の急病や怪我などにも対応する施設としての側面も持ち合わせています。また、病院から離れた集落の方々のため附属診療所を設置し診療を行うほか、在宅患者さんの訪問診療や訪問看護を行うなど、この地域にとって欠かせない病院として信頼を築いています。

診療科目：内科、外科、整形外科 職員数：約40人 【医師募集中(常勤又は非常勤)】



スタッフインタビュー

➤ 医師：高梨 俊洋 先生（東京都地域医療支援ドクター）

Q1：奥多摩病院でのやりがいは何ですか？

- 慢性期疾患から急性期疾患，専門科を問わず幅広く診療できることです。また地域密着型の病院であるため、疾患の治療だけでなく、患者さんの人生そのものを診る(看る)ことができる点は魅力的だと感じています。

Q2：奥多摩病院の仕事で大変なことは何ですか？

- Q1の回答がほぼそのまま当てはまると思います。やりがいのあることは時として大変になることもあります。あとは、訪問診療時の一軒一軒の家が遠い、道路が狭い、電車がすぐ止まる・・・くらいです(笑)。

Q3：奥多摩のおすすめの場所や食べ物等を教えてください。

- 奥多摩駅のそばにある「クラフトビール醸造所 VERTERE」さんがおすすめです。ビールがおいしいのはもちろんですが、醸造所に併設されているタップルームも古民家を改装したおしゃれな場所で、奥多摩の自然を感じながら飲むビールは格別です。

Q4：どうして、東京都地域医療支援ドクターになりましたか？

- 研修医時代にお世話になった奥多摩で総合診療の修練をしようと思っている中で、支援ドクターの制度を紹介してもらいました。地域医療に従事できると同時にキャリアアッププランで専門的研修ができる点も魅力的でした。

『東京都地域医療支援ドクター』東京都では、多摩・島しょの地域医療の拠点である公立病院等を支援し、地域の医療体制を確保するため、キャリアアップ勤務と支援勤務を組み合わせた「東京都地域医療支援ドクター事業」を実施しています。

➤ 看護師：宮崎 和之 さん

Q1：奥多摩病院でのやりがいは何ですか？

- 奥多摩病院は、多彩な機能を有しており、病気の予防・病気やケガへの対応・救急車の受け入れ・お子さんから高齢者まで診る医療・自宅に伺う医療・人生の終焉を穏やかに看させていただく医療など、地域に根差した多様な看護ができることです。

Q2：奥多摩病院に勤務してみて、以前の勤務先との違いを感じることはありますか？

- 以前は、急性期の病院へ勤務し、病棟業務をこなす日々でした。しかし、奥多摩病院に勤務するようになり、今までとは違い地域に根差した医療を提供する病院だと感じました。病気や障害などがあっても住み慣れた家や地域で安心して暮らせるために、家族・福祉・町の保健と連携して、できる限り元の生活に戻れるようサポートをしたり、病院の中だけではなく、訪問診療・訪問看護により安心して生活できるよう医療を提供していると感じます。

Q3：奥多摩のおすすめの場所や食べ物等を教えてください。

- 鳩ノ巣駅から徒歩1分の場所にある「カフェ山鳩」というお店を紹介します。奥多摩の野菜、旬の食材を使った料理です。何を食べても美味しいですが、個人的には蕎麦サラダをお勧めします。



奥多摩病院全景

西多摩郡檜原村 2717 檜原村やすらぎの里 けんこう館 1階 ☎ 042-598-0115

檜原村唯一の公立医療機関である檜原診療所は、レントゲン装置、CT装置、電子内視鏡、理学療法機器等の設備の充実によって更なる診療レベルの向上を図り、疾病予防を含めた全ての住民健康管理にあたっています。

診療科目：内科、外科、小児科、歯科 職員数：約15人 【常勤医師募集中】



スタッフインタビュー

➤ 医師： 所長 田原 邦朗 先生

Q1：診療所におけるやりがいは何ですか？

- ✚ 長く仕事をしていれば、生まれたばかりの赤ん坊が大きくなって、自分の子供を連れてくることもあります。

Q2：診療所の仕事で大変なことは何ですか？

- ✚ どこまで自分で診るかの判断が難しいことがあります。たとえば腹痛で救急受診が必要かどうか迷う症例など。島ほど大変ではありませんが。

Q3：檜原村の好きなところを教えてください。

- ✚ 溪谷。水が流れているのをいつまでも眺めていられる。村中どこにでも、川があり溪谷があり、滝があります。写真は、私の一押し、神戸岩(かのといわ)

Q4：なぜ、へき地医療を選びましたか？

- ✚ 自治医大出身で地域医療にもともとなじみがあったところで、卒後の派遣で来ていた檜原が気に入り就職しました。志したというほどでもない理由ですが、着任して今年で30年になりました。

➤ 看護師： 杉田 あゆみ さん

Q1：診療所におけるやりがいは何ですか？

- ✚ 診療所に来られる患者さんの多くは、高齢者であり単身世帯、老々世帯の方です。加齢により在宅での療養が困難になる場合が多く、地域の介護、保健従事者の方々と連携を取りながらできる限り在宅療養を継続できるようお手伝いさせていただけることにとてもやりがいを感じています。

Q2：診療所の仕事で大変なことは何ですか？

- ✚ やりがいに思うことと同じ内容になってしまいますが、山間へき地であるため、介護サービス等の提供に限度があり、24時間の対応はありません。そのため、在宅療養を断念しなければならないケースもたくさんあることです。

Q3：檜原村の好きなところを教えてください。

- ✚ 人口減少が進み高齢化率も上がっていく中で、地域住民の方々が「地元を盛り上げるのだ！」という気概を持って地域活性化のためさまざまな活動に取り組む姿に、強いエネルギーを感じます。



檜原村やすらぎの里



神戸岩(かのといわ)



檜原村診療所診察室

特別インタビュー ～東京都の山間地域における地域医療について～

奥多摩町国民健康保険・奥多摩病院 院長 井上 大輔 先生

《プロフィール》

自治医科大学卒業。平成14年東京都入庁、都立広尾病院勤務。平成17年から平成26年3月までの間、都立病院での勤務の他、新島村診療所、利島村診療所、青ヶ島村診療所、奥多摩病院に出向。また平成23年に東京都へき地医療支援機構専門官を歴任。平成26年4月奥多摩病院着任。平成30年奥多摩病院院長に就任。

専門は総合診療。日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医。



遠藤徳人（聞き手：令和3年度東京都へき地医療支援機構専門官）：今回は奥多摩病院院長の井上大輔先生にインタビューさせていただきます。井上先生、早速ですが奥多摩病院で勤務されてどのようなところにやりがいを感じますか？

井上院長：豊かな自然と心優しい住民の皆様が囲まれながら、総合診療、地域医療を実践できることです。

奥多摩町は人口が5,000人と小さな自治体ですが、ある程度の規模がありますので、保健・福祉資源が一通り揃っている一方、小さいがゆえにお互いの事業所同士が顔が見える関係で仕事ができることも大変魅力的です。地域包括ケアシステムを構築し有機的に運営するには最もやりやすい場所の一つではないでしょうか。

遠藤：お互いの事業者の顔が見える関係で仕事ができるということはとても魅力的ですね。反対に奥多摩病院で勤務されて大変だなと感じるところはありますか？

井上院長：へき地医療の現場ではよく意識されると思いますが、ここ奥多摩でも「目の前の患者さんから逃げない」姿勢が求められます。医療資源に限られた地域では、特に高齢者は医療機関を選べません。何かしらの健康問題を抱えた方が私たちの目の前に現れた時、自分自身もしくは他の方の力をお借りして必ず解決につなげなければなりません。自分ができる能力、技量には限界がある一方で、求められる医療の分野は幅広く、常に自己研鑽を続ける必要があります。このあたりのモチベーションの維持が正直大変です。

もちろん自分ができないことも多く、いざという時に頼りになる高次医療機関や、連携を取れる診療所・クリニックとの良好な関係作りにも努力が必要です。

遠藤：医療資源の限られた地域では、特に目の前の

患者さんにしっかりと向き合う姿勢が求められますね。それに応えるために自己研鑽を続けることは重要ですが、同時に非常に大変なことです。

地域における奥多摩病院の役割を教えてください。よくすることはできますか？

井上院長：当院の役割は多種多様で一言では表現できません。乳幼児健診から在宅看取りまで、ありとあらゆる医療に係わります。その時その時の地域のニーズに合わせて、自分たちの形をフレキシブルに変えています。

奥多摩町は高齢化率が50%を超えており、大きな役割の一つは高齢者医療です。高齢者が抱えている疾患や、ご家族や社会的な意味も含めたプロブレムは多岐に渡ります。疾患については日頃の生活習慣病の管理、急性期疾患に罹患した際の外来・入院・在宅医療の提供、必要時は高次医療機関との連携、また地域包括支援センターや自院の訪問看護師と連携した福祉的なサポート、時には家族問題の解決まであらゆる事柄に対応する必要があります。病気で人生の最終段階の患者さんと絶縁した家族を引き合わせ、亡くなった後にお墓に入れてもらえるよう頼んだこともありました。

遠藤：変化する地域のニーズに合わせて役割も変化しているのですね。疾患のみならず、家族問題の解決など非常に幅広く対応する、まさに地域医療の醍醐味ですね。

井上先生から見た奥多摩地域の特徴や課題は何でしょうか？

井上院長：高齢化が急速に進み高齢者単身世帯や老々世帯が増えていることです。福祉資源のニーズが急速に上がっていますが資源が限られているため、生活上のサポートをどうしていくかが大きな課題です。これは病院単独で解決できる問題ではなく、おそらく政治的な判断が必要になると思います。

遠藤：奥多摩病院の総合診療専門医プログラムについて教えてください。

井上院長：当院は日本専門医機構認定の総合診療専門医や日本プライマリ・ケア連合学会認定の新・家庭医療専門医の後期研修プログラム「おくたま清流塾」の基幹病院です。慢性期外来や在宅医療を中心とした診療所型の“総合診療専門研修Ⅰ”と救急診療・病棟診療に重点を置いた小病院型の“総合診療専門研修Ⅱ”の両方を当院で行えることが特徴です。2年間にわたり一人一人の地域住民の皆さんに継続的かつ包括的なケアを提供する中で、プライマリケアに必要な医療技術、精神を学ぶことができます。

●基本情報

プログラム名	「おくたま清流塾」 東京都のへき地医療機関で行う 総合診療研修プログラム
プログラム責任者	奥多摩病院 院長 井上 大輔
主な研修先 医療機関	奥多摩町国民健康保険 奥多摩病院 地域医療振興協会 東京北医療センター 地域医療振興協会 練馬光が丘病院 地域医療振興協会 台東区立台東病院
プログラム修了後に 取得可能な資格	日本専門医機構 「総合診療専門医」 日本プライマリ・ケア連合学会 「新・家庭医療専門医」

遠藤：奥多摩のおすすめの場所や食べものを教えてください。

井上院長：幻想的な空間が広がる日原鍾乳洞はお勧めです。年間を通じて気温が一定で、夏は涼しく冬は暖かく過ごせます。



(日原鍾乳洞)

奥多摩の地の食材として幻のイモと言われる“治助イモ(*)”は味が濃厚でおいしく、“奥多摩ヤマメ”は身に脂が乗っていてとてもおいしいです。

* 治助イモ 江戸時代に日本に伝わってきた原種に近いジャガイモで、明治時代に治助さんが隣の松原村から種芋を持ち帰り奥多摩町峰谷地域で代々受け継がれてきたものです。普通のジャガイモと比べてねっとりして粘りが強く、煮崩れしにくいという特徴があり、味が濃厚でおいしいといわれています。「治助イモ」は平成24年6月に奥多摩町が商標登録をしています。

(JA 東京中央会ホームページから引用)

遠藤：休日はどのように過ごしていますか？

井上院長：独身時代は奥多摩に住み、町の運動会に参加したり地元のバドミントンサークルに所属したり充実した余暇を楽しんでいました。家庭を持つてからは隣接する他の市に居住し休日はもっぱら家族サービスです。数年前までは休日の呼び出しが多かったのですが、当院の在宅医療の充実と共に看護師が対応、解決してくれることが多くなり、緊急登院はほとんどありません。

遠藤：新型コロナウイルス感染症が増加しておりますが、奥多摩病院では新型コロナウイルス感染症に対してどのように対応していますか？

井上院長：COVID-19 感染症については、陰圧装置を備えた発熱外来で対応しています。一病棟しかない当院の特性上、入院患者さんの積極的な受け入れは困難ですが、地域の保健所、高次医療機関と連携し地域の皆様が安心できる体制を構築しています。

遠藤：最後に山間部医療に興味のある方へメッセージをお願いします。

井上院長：「へき地」は得てして人的、資金的な援助をいただいている受け身の立場ですが、地域包括ケアシステムを中心とした地域医療は逆に都会へ発信できる大きな魅力の一つです。心温かい住民の皆様と雄大な自然に囲まれながら、医療従事者として“病”を癒すことは基本ですが、多様な方法を尽くして“人”を癒す医療が実践できる場所がここ奥多摩です。ご興味のある方はぜひご連絡ください

聞き手：遠藤 徳人

《プロフィール》自治医科大学卒業。

平成28年東京都入庁、都立多摩総合医療センター勤務。令和元年度神津島村診療所、令和2年度御蔵島診療所に出向。

今年度東京都へき地医療支援機構専門官。



編集・発行

東京都へき地医療支援機構(東京都 福祉保健局 医療政策部 救急災害医療課 医療振興担当内)

【電話】03-5320-4428 【Fax】03-5388-1441 【E-mail】S0000299@section.metro.tokyo.jp

【HP アドレス】 http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/joho/shokuin/tousyo_bosyu/index.html

ご意見・ご感想をお寄せください